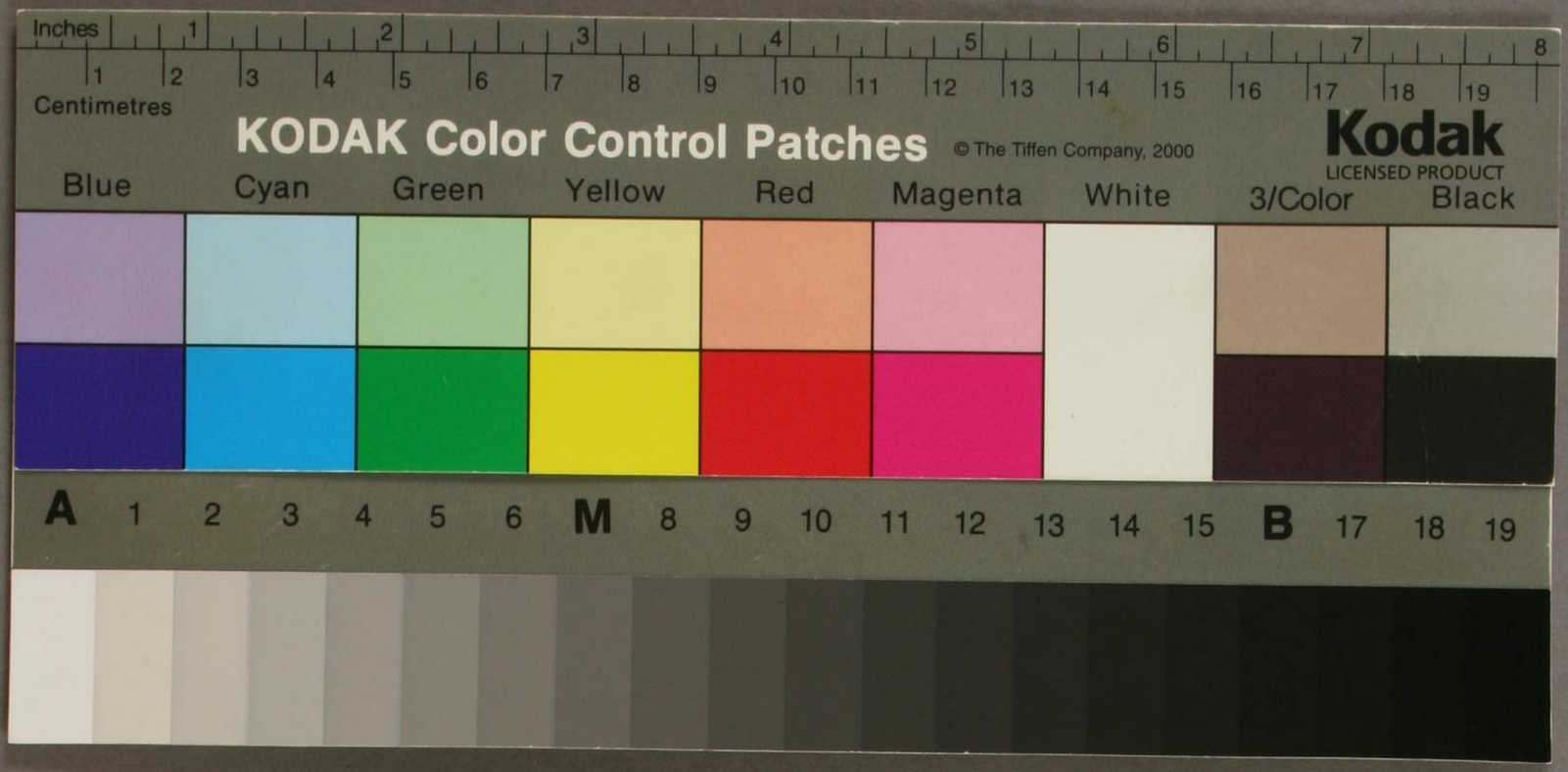
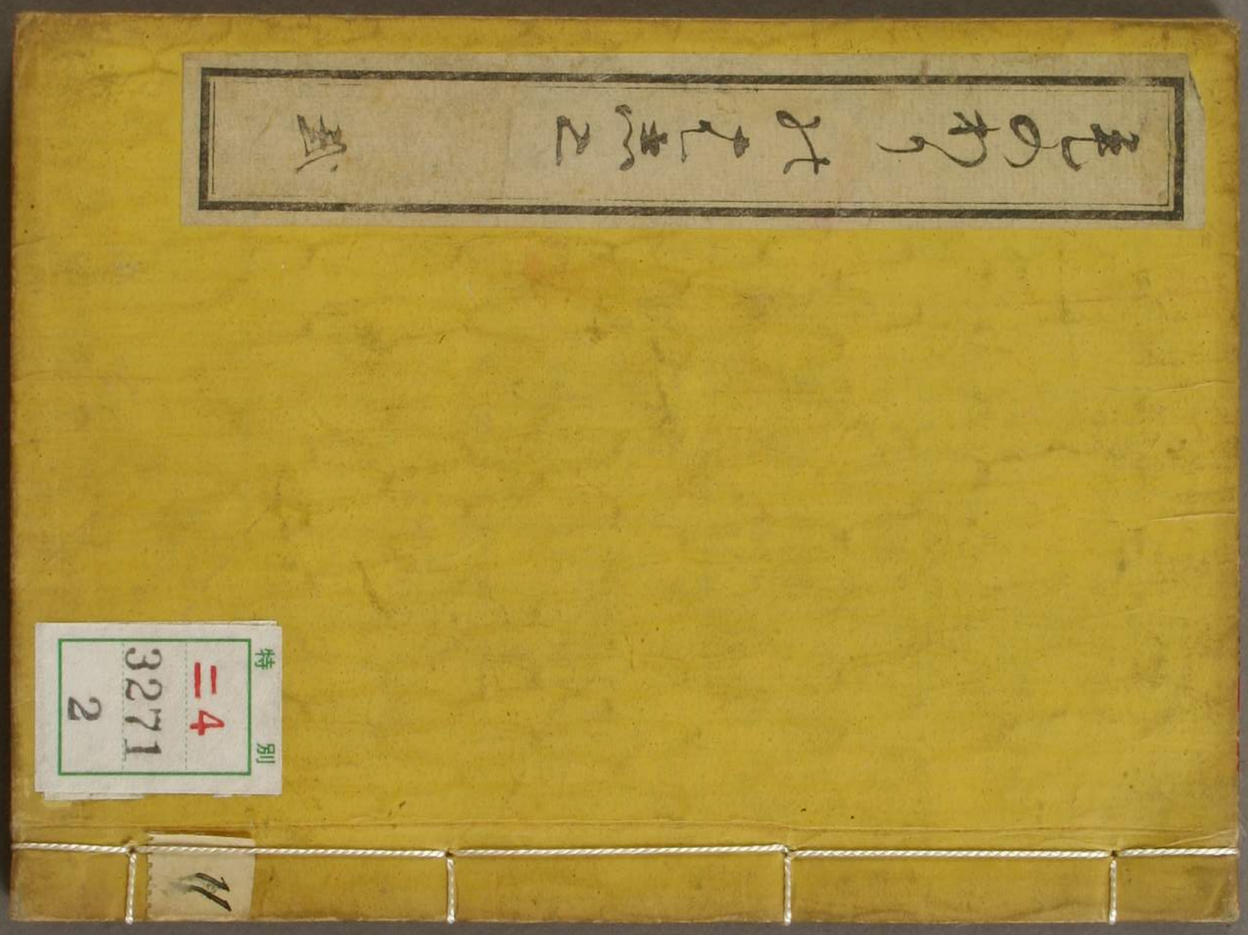

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black


特
別
二4
3271
2

門 二4
號 3271
巻 2

冊號 三 函 辛 ヤ

ところめ の ありぎり、
かね、ならびに かね の まつでぬ、
やまもと、ならびに うしまと、

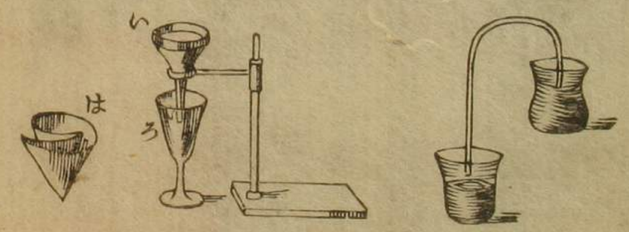
二十四、やまもとね と、うしまもとね といもいね とむべべ、やまもと と ぎり、うしまと と ある、これらつ うしまり の あと と、いふて かるめ な 者 で ある、また これら ところ から たゆに、ぬ ぬ に や と ちりげ の ぬと と ふ、（ふたりめ の きり を ちよ、）やまもと は ふ ぬ ぬ の うちに あり、うしまと いう ミ の うしまと の うちに ある、

ため 者、

一、やまもとね と うしが ぎぶ の うちに ゐれば、ぶ の 又 に うして、ひが ゆえ、ところ そ の かね が ぎぶ の うち の ものね と むつびて、やまもと の とも者 と ある、

二、きと もまそ、その ヒひ を ゆめ、これ に ぎぶ と そそぎ、その うち の やまもと を とかも、これ に ムきき の あとい とかも 者 と ムうれば、その うが ゆそぎ に かる

三、ろうがねの底に、とうげけあのいあもとと、
ほそきのやまもと（えんあつ　ごびし）とを、かるあ
めかたづけられ、これにその　めかたの十二、ぢい
むかりのとうをいれて　にる、この　きの　ほい
いあもと　とあつびて、とうにとけ　ふい　きほきのいあ
もとと　なり、そのやまもとにそのとけあるのうー
ちにのとる、　この　まぜめに　ふたを　あて、そー
の　きほきのいあもと　のあどむ　まで　ほあき、た
つがあらの　あかけで　こあ、とけぬ　あるのかどとにいね
とけ　ある、この　ほあ　あかけいあるとい、のうちにこあがと　ホ
ゆそ、その　とけあるとこあす　さて　この　あかけで　きほた　あるいうー
つホのろに　たれおける、その　とけぬに　おどむ　めいこあがと
のうえにのとる、この　こあを　いまく　きりたかを　をあるどに
とりて、あちこちに　あけ　つる、この　かを　を　あるどにのうも
にあく、これいあるのとりは、のかたちとなる、ことに
とうとあるふあるを、その　そとのかを　のいたまあやりにとろ
ぶて、その　とけあるを　のかたかいより　つぐ、ただ　あるある　まく



に、その　こあがを　あけ　ふ　で　ぬいき、その　きほた　とけあるを　とあとける、りあ　この　やまもとのとけあるを
ホのけのまま　に　さらあ　あけ　べ、きほやかに　きほ　の　き（ホのけのうちの）を
きひとりて、きほのやまもとにのどる、
四、きほきのやまもとのこい　とけあるに、さらいあのきものとけあるを　ふらへれべ、きほの
きものがきいぬけで、ふたくさかいあきものやまもと（びたるとれいとあふ　ぷとあき　を
ぷいむ　あふ　なるなる）のこりだちた　あホが　できる、
五、むせびきのやまもと（えんせう）とうにいれ、その　あホのできるまでにつも、
そのういあると　あたたえ、さきせべ、ホそがいるかくのかたちのこりだちたえん
せう　のあホとつる、
うえもとい　うえきのもひのうちにのり、またつねのあホからもとれる、この
うえもとのきぶろひ　あい、きとによく　やまもとのきぶろひのにそいる、

いあもと、

二十五、あらあわ、いあびいあ、らうせき、かきがら、ねらびにいあもとだちのいあい、きべて

いまぞひと、もこのもの まぎろひめである、いまとい まぐてまいつちの、もーとだてのかもるところとねも、いまとい きき、ならびにけめにまぐて、その ふられとちめ、ここにおとる ろういがもをもふ、いまぐひいとかるまうーむとそ、いまとれねと、ぎろうかねのもめである、

ためき、

一、いまぐひとうとひらいたもちにいれ、そのけにさらせべ、そのとうのらいつらにあまかいのやうに、もこまものいまとと ちる、京十二、のきうの、二、三、四、どをよ、

二、まらまいちのうへに、とうまれのもと、あとのたちきえるまで ふられべ、とうーまれもものいまとがでる、

三、まへのためまのとやり、まらまいちにまぐびのもと ふられべ、むせびすのいまとと ちる、

四、とうまれぞのいまとと もこまとろ、そそまがいとろぷにられ、またおかのとろぷにいつものいひうのもと、かまぐ ねどられ、これと もこまにまへのとろぷにつげべ、むげまさ、ひきたちて、そのとうまれのもいぬけどそ、ここにかたくまろいのものがでる、これいいとうぞのいまとである、これいとくちる と、まぐらまいぬ、

ぬ、いまとこのとちまるに、まかぶぞのあむもにや（十六の七のためまをとよ）をふられべ、まろのもかぶぞのあむもにや とそ、まろい とけぬものがあどむ、

にがつち、

二十六、このまちいまぐねまや といそ、ふもうにもちる、これいうこのちまれのうちにありて、いまぐひのかいつたためのやうにこえる、またあれくいづこのとうのうちにある、このにがつちいまぐねまうむとそ、にがつちねと、ぎろうかねのもめである、

ためき、

一、いひうのもとちまくまそ、もこまもこのにがつち（つねのまぐねまや）を、そのあぐくのたちきえるまで、ふられべ、いひうちぞのにがつち（にがまれのかたまり）のとけ

ゑるとゑ、

このゑぐとゑとゑ もげりたてて、（やげりいせとめのえちにいれ きまがいろ、またいぶイ
き、ゑるいゑぶねでつくりた、けゑりづつのゑる、ゑる一
まで、ゑづめ あけば、その ゑれ のこゑりが できる、
がんと そゑゑびで あたらゑる、

とれが にがゑれ のかたゑりである、

二、いろろぐゑ のにがつちのとけゑるに、ゑとゑゑのやまゑとのとけゑるをころへれ
ば、ゑとゑゑのにがつちの、ゑろいゑどゑとが できる、

にがゑれと、ゑとゑぶのゑとと、ゑゑゑゑめゑゑゑぶゑるとと ゑり、これいそのてだ
てで とゑける、 ゑれ また ゑとゑぶ ゑく、にがゑれいにがいの
で ゑある、 また ゑとゑぶのゑいゑ ゑちゑゑゑ ゑいゑいゑびのうちにいれゑべ、きゑゑゑるが、ゑぶ
ゑれいかへて、ゑとに、ゑろいかたゑり をのこゑ、

えにつち、

二十七、このいちいゑるみたゑむとゑ、とにえたつちねとゑつゑるかねのゑものであ
で、つねのねづちのうちにゑびたぐゑくゑる、 とれいこぐにとけゑことと、

やまゑとのとけゑるに、とけることゑでこゑける、 めうぞんいえたつちと、やまゑとと、
ゑうちのゑを ゑゑゑむ ゑめで、どく いりまうゑ めで、つねのゑまぐひりめの の
ひろで ゑる、

きれいゑ ねべつちいせとめにつゑるいちのとで、かゑりんとゑふ、これいゑまぐゑ
と、えたつちとのゑまぐひ めので、ゑまぐゑが三ぶ、えたつちが二ぶ、だゑりの
つりゑひで、できた めので ゑる、

ためゑ、

一、めうぞんのとけゑるに、ゑゑむもにやを ゑゑれべ、えたつちが ゑどゑむ、これいそ
のうちのゑがゑゑゑむもにやと、ゑうぶ ゑけで ゑる、

二、また ゑゑゑゑでも、うとゑゑとでも、ゑゑとゑゑ ゑゑゑゑ ためゑが できる、

三、めうぞんのとけゑるに、うまのゑで つゑうた、かごを かけゑれ
ゑ、ゑうゑゑると その めうぞんが ゑつこゑく、その うまのゑのうくに、ゑりつこ、
めうぞん かご といふ めめが でゑる、

まさごうち、

二十八、このうちハまさうち（まうか）とて、たたちのとうり、おびたゞまく、せおいにする、もゝまうかうハかとんど まぎり かの のうへまさうち（まうか）で、まさや、つねのかうちかまのどく のかとだそのうめである、これハねがうちとまぎりて、だいちのいちとする、まさうちハまさうちね（まうまむ）のもいでうめである、

ためあ、

一、とまかの もゝる（でゝたれバひうちかまのとゝる）をひとまきうに、もとゝものやまもとの、と まもを まぜ、ゝうがにのれ、やき とかせバ、もとゝのすハぬけでそのまさうちと、やまもと とがむつびて、びんどうと ゝる、これを まさうちぜのやまもとと ゝふ、ゝうにふく とける、このまさうちぜのやまもとを ゝうがねのいたにあり ゝがもて、そのうちのもとゝを ゝうにとかせ、このためあハたがゝまさびにいて、かうとも たのせうねとでゝる、このとけるをぐうりくにぬれバひふ ゝうゝる ことハない、

二、まさうちぜのやまもとのとけるに、ゝうゝまれぜのおむもにやのとけるを ゝうゝる、そのゝうゝまのもハやまもと、むつびて、まさうちハ ゝうどむ、

ゝうがね、

二十九、このかねハどく いうゝうゝる ゝまで、いうゝうにかうて、せおハのうちいうどにもぐる、まうもいねとむつびてハ、もいでのゝうがね、いうゝうとハ、いうゝうでのゝうがね、もゝとのもとハ、もゝすのゝうがねとゝうて でる、

ためあ、

一、ゝうがねのやまうゝうをこぐらにのれ、とゝを さびゝる まで、むびにぬらせべ、もいでのゝうがねとゝる、もゝいちとうさびのとである、

二、ゝうがねのやまうゝうにうもくまたいうゝうのもをゝうゝれバ、もの ゝうがねのがもいぬけでて、ゝうがねのとけるを（ゝうゝもの とけるとゝふ）とゝる、

ことにハそのゝうがのうちの、もいねがゝうがねとむつびて、もいでのゝうがねとゝうゝ、またそのいうゝうのもとゝうゝまびて、いうゝうぜのもいでのゝうがねとゝる、

これをつづめて、いとうすの　ろうぐねといふ、
その　まきたらい　まるを　またを、その　らんぎを　ひげりて、まやあく、あまが
さめれば、とどり　いつの　とりを　つる、これは　とびきり　のろいで　ある、
三、いとうまの　ろうがねの、とい　とけまを、ろうをいれた　ろうの　びいどろ　ゆや
りんに、ふるれ　とれれ　づつ　たらまとむ、
一、まぎめ　のちやうんには、やまあと　の　とけまを　ろくる、とこに　い
まいで　の　ろうぐねが　あどむ、
二、つぎの　ちやうんには、まきまの　やまあとを　ろくる、とふ　まきまの
ろうがねが　あどむ、
三、ろうめの　ちやうんには（ぷるまやとの　ぷつとあまを）あをぎ
の　やまあとの　とけまを　ろくる、とこには　ろうくまの　あをい　あどと
をつる、これは　べろとふ　ふのぐで　ある、また　ぷろまや　あねと
いふ、

この　ろうの　ためまでは、いとうの　まが　やまあと　とむすびて　その　とけまの　う
ちに　のる、
四、ろうめの　ちやうんには、きぶまの　にまを　ろくる、とこには　ろう
を　をめる、ろうい　ふまぶの　ろうがねが、ろうかの　まに　あらられる、
四、ひと　ちやうんの　ろうに、ろうかの　まを　の　まる（かの　ろうの　もぶを　かく　まを）
をたらまとを、これに　をかぶの　まを、また　ろうまの　まを　ろくれば、その
いろいまえて　ゆくまる、
五、いとうまの　ろうがねの、どく　ろまい　とけまるで、かをの　うえに　もぶを　かき、
これが　かりけば、その　もぶいとえぬ、これを　ふまぶの　やまあとの　とけまるで、
あらくば、その　もぶいろくまく　あをい　いろに　あらられる、

あつがね、

三十、このかねいらぶのままで、せかいのちちにぐる、されども　あもにいちぐ
の　あつがね（とぷる　ぴりてい）とまりて　いぐる

ためし、

一、あかがね をひの うちにやいて、まるど とろ のうちにつぎこむと、そ
のかね のそとつらに、こけ のやうに、まいで の あかがね ができる、
二、あつがね の ひとひら をいろ の あいそどにうもめた、むせびのものう
ちにいれば、その あつがね のひとぶんハ、もとあつに とみて、うつくあく あたいむ
せびもの あつがね のとけまると ゆ、とにハそのものひとぶんが、その まいねを
あつがね にとけあつて、その むせびの もと むつびた、まいでの あつがね と ゆる、
とにむせびがも の あかい けぶり をおとも、これ を ぬげれば、とりだちた
その ゆれが できる、
三、いとうぎ の あつがね（たんぽん）の とけまるに、ゆれいる ろがねのいたを
いれ ば、その たちの そとにあつがね が あどむ、これハ ろがね と、もと ろが
あひて、いとうぎ の ろがねと ゆう、その あかがねハ とゆれて、あどむのである、
四、いとうぎ の あかがねの ゆ とけまるを ふたたれ ごろ、ふたつ のゆ と

それ たちゃうに ゆつて、ゆ とけまるハ いろの ゆい ゆらゆ である、
一、もぢめ のちゃうに、あむもにや のひとたれを ゆれば、うもあ
ゆい まいで のあつがねが あどむ、もと あむもにやを いれもどすと、
その あどむハ ふたたび とけて、うつくあい たいいろと ゆる、
これハ あかがねのけを とるにどく ゆい ところで ある、
二、ふたつめのにハ、もとまるの やまあと を ゆれば、うもあをハ も
とも の あつがね が あどむ、
五、むせびぎ のあかがね のひとかけを、もぢ のかるがいの ゆ に おき、その かけ の
ゆ にゆづを たらち もとゆかに まきつめ べと にぶ ゆい ものつり の
つぎ を あつまて その かるがいハ ゆえる、

みまつ、

三十一、つね にぢ ゆまつハ、ゆいとうぎ の ゆまつ である、

ためし、

一、なまりを　ふるがねの　さゝゑにいれ　やけば、もとゝかに　とけて、のちにいわのけ
からもいねを　とりて、もいでの　なまり（ろだそう）と　なる、
二、ちやうしんを　ながつ　ながらべて、おのおのの　これに　かもぢの　なまり（えんたう、ろう
ど　そのほか）の　うちい　とけあを　つぎいれる、
一、ちやうしんに　ものを　ふくる、ことに　もいでの　なまりが
おどむ、
二、つぎの　ちやうしんに　もとまの　やまあとを　ふくる、ことに　なま
いもとまの　なまりが　おどむ、
三、ろうの　ちやうしんに　いろうのも、またいろうぢめを　ふくる、ことに
いまつの　いろうぢの　なまりが　おどむ、
四、ろうの　ちやうしんに　ぢまれの　もを　ふくる　と、ぢまれ　なませの　なまり
が　おどむ、
五、いろうの　ちやうしんに、ろうどもの　やまあとの　とけあを　たらもとあい

ふるくもの　きいろい　ろうどもの　なまりが　おどむ、
六、むつめの　にに、ところむぢの　やまあとの　とけあを　たらもとあば、き
いろい　ところむぢの　なまりが　おどむ、
七、なまつめの　にに、ぢいろうぢの　のあむもにや　を　ふくる、ことに　ふる
いいろうぢの　なまりが　おどむ、なれ　六十の　きりの、四の　なまをもよ、
三、かもぢの　なまりの、そどろく　といとけあるのうちに、とたむの　ひと　かけを
かけさげれば、その　なまりは　とたむに　まとひついて、きの　えだの　やうに　なる、
これを　なまりの　きと　いふ、ことに　いとたむが　なまりの　ところを　ふくて、そ
の　なまりは　ひとり　おとむの　である、

ところむぢね、

三十二、とのかねの　ありふれた　なれ　は、ふたくとろむぢの　やまあとである、

ためぢ、

ちやうしん　ろう　を　さらべ、いづれも　とれに　ふたくとろむぢの　やまあとの　うちい

とけるを ひらいて、

一、そばの のちゃうに、もとまの やまあとを みつくると、その あまる もとあいさうて きいろく かりて、ところむぎの やまあとと ある、

二、つぎのにハ、かもずの ゆまりを みつる、三十二、のきりの、二の たゆまを をよ、

三、ところのにハ、むせびまの こづかねを もとゐたらゐとむ、さて ちもろと かをいろに いろづいて、ところむぎの ところかねが あどむ、

四、ところめのにハ、むせびぎの ゐろかね（せうさんぎん）の ふたられと、 たれを みられば、かいらけ いろ とありて、ところむぎの ゐろかねが あどむ

こづかね、

三十三、この かねハうぶの ままで、ぞうとも ある、あれども あれ いろうの もと と みをあひて ぞ、

たゆま、

一、こづかねを もとゐ たゆまだに みれ、その そを せうもうの とものゐびでぬ みれ べ、その こづかねハけぶと ありて のぞり、その みだの ひやとの ところにつ ぶつぶたちて とり たまる、

二、いろうを こづかねあり、いろうき そのりも あれくを とり、とのた たゆまだに れ、その みだの ゆちを ひとさゐ ゆびで、かろく ふきので、ぬ あれ べ、ふたくいろうでのゆ づかね とて、ゐ（ゐのぐの ゐ）と ある、

三、ゐやせの こづかね（ぺれゐびた）の とけるに、ゐうどぎの やまあとねを もこ ゐ たらゐとめ べ、ゐかい ふたくゐうどぎの こづかねが ゐづむ、

四、こづかねを むせびのもたられ、ぬ あれ べ、その こづかねハ まづ その もから、もと ゐ もいねを とりて、やらやく その れか のところ まで むつび、こに むせび ぎの こづかね のとけるとある、

こたむ、

三十四、この かねハ ゐ や、ゐがゐぐち をつるに もちゐる、

ためき、

一、十四、のきりの、一のためきでつくりたる、いとうぎのとたむのとけきをとり、そのとぐをねどまくぬげりたて、その きを さまき あけべ、いとうぎのとたむがぶりむまがたらにとる、

二、いとうぎのとたむのとけきるに、あむもにや（でなけれべやまあと）をもとき たらきとめべ、きりいもいでのとたむがもどむ、もき その あむもにや をいま もどせべ、また その もどを がふたたび とけかる、

三、とたむのとけきに、もとき のあむもにや をもとき たらきとめべ、もとます のとたむとなりて きづむ、その あむもにや をもどもとき へ、また とけかる、この ふたりのためき へ、とたむを とまらぐるのにもちる、

きりかね、

三十五、きりかね へ その ぎらく ひかりと、うときく きりのいろとぐ、とを ける、

ためき、

一、きりかねのちのさまつぶをもとき とり、ちもめた むせびのもを ちく、その けぶりのきとる まで あたためれべ、むせびぎのきりかねのとけきるとる、その とけきる へ さめれべ、その かねの きれのとりを むもぶ、

二、むせびぎのきりかねのとけきるに、やまあと をちくれべ、もとのぎのきりかねが もびいろのとき とりて、きづむ、

三、むせびぎのきりかねのどく ちもの とけきるに、とぐきれの のもを ちくれべ、きれぎのきりかねとなりて、きりく ねびつく ものを もどむ、これ へ あまりひの ひかりにあそれべ、ぢきに ちりく ちる、

四、むせびぎのきりかねのとけきるで、ゆきねののうへにもぎをかへて、その もぎのかりへた とき、やまあとのとけきるであく べ、もとのぎのきりかねのさまに ちるまいて、ぢきに もびね ちりとちる、

とがね、

三十六、このかねハそのけにあたりても、さびるとき、またつねのもとハ
もとまもかるとハ言へ、

ためし、

一、とがねのそくを、いろひら、むひら、ためし、うだにいれ、むすびのもと、まぜ
のもとの、まぜめをもとまたらさと、せちやちの、とまさびのそのれにあてれ
べ、そのとがねハとけ、まれ、そのうちの、もまるもの、たちうまるやうに、やらす
ひでぬめれべ、そのあとに、さくまれのとがねがのこる、これハとぶまれ
のもから、まれねがもれて、とがねとまちびたのである、
二、びいどろいたのわけいた、さまれのとがねを、ふたれ、さたれ、たらまそ、せちす
ちうのとまさびのそのれにあてれべ、まれねハとびちりて、とがねがびいどろ
いたのうへにのこる、
三、まれのさぶらねのひとたらまを、とがねのかるめにたらまと、とがたる
のさきでかきまぜ、ながら、とがねにあてれべ、まさまく、とがねのいがらがた

のもろいまれができる、
四、さくまれのとがねをもび、またいてにつけると、ろくまくべにのいろに
そまる、まれどもいかむいかののちにハ、ろもそもそ、つひにハへがあちる、

ぷらちねし、

三十七、このかねハひにとけるとも、ふく、またきのうのろのぶるめで
ハ、うどかもとも、ふらぬ、とけから、まれくめのろのまかけの、いろいろるろ
ハをつくるにもちゐる、

ためし、

一、むせびのもに、ふまぶかきのとぶまれのもをまぜて、このまぜめをふ
ろれんもの、ふらもとにいれ、ぷらちねのもがねのうぶをもこまらくて、ふ
も、ただまそのまるのにえたろ、ふらぬのぬくこで、その もの まれぬまち まを
やうやハとぬめる、こにそのふたくまれのぷらちねができる、
これをまたくものけまにるにハ、そろそろとかるく まで につめて、その

のこり めを そぐに とかも、

二、ふたくあれせ、の ぷらちねの とけるを、ひとたれ そど ひとろの ちやうちんの そぐに らく、この ちるに ようぶぎ のやまもこの、ひとたれ をたらせ ど、ぢきに この とびいろ の まぢろひめ と ある、これ いげに ある ちろい ためち で ある、

三、ふたくあれせ のぷらちねの とけるに、そぐちれぜ のおむもにや の とかちろを らくれ べ、きらろい おどもこが ぐ ある、これ いこの ちれ と、ぷらちねの まぢろ いめ で ある、

その ちろいそぐ を とぢあて、その おどもを きせる のがんこび、(ぎきめの のきせる) また いちひさい るつぢ にれ、ひにあて、まあに やけ べ、ぷらちねが かるいち の さまと ありて のこり、その れかの めいひの ぬこを で とびらせる、

四、その かるいち の さまの ぷらちねに、そぐね のがを を ふきあれ べ、その かね いぢきに まかに やけて、その がを にひが つく、

ふつめ の あれぎろ

さぐ の をちへ、

三十八、ちよそ めと めの とが たがひに むつぶに い、ちあの その めかたに きまろが ある、いま おちま まぢろひめの いろでも ちるま ちれを ふこそ、その きまろの めかた で、むつびあふた めで ある、たとへば そぐいいろの めかた でも、その できた ところ で ハ、ちろねの ハぶと、そぐねの一ぶとの、ちもさ で できる、また そぐねの一ぶと、いころの十六ぶと の ちもさ で むつべば、いころ での そぐね と ある、また そぐね の一ぶと ちこねの六ぶと の ちもさ と むつべば ちこで の そぐね、(あれひあんとぶ も) と ある、この めかぢで、その めの むつぶ めかたの つちあひ と ある、これも の ころの つちあひめ と ぢる、

とに そぐねの むつぶ つちあひ を 一、と たれ べ、ちろねの むつぶ つちあ ひめ い ハ、で、いころ い十六、ちこねい 六、に あたる、 ねれ また その ハ

と、六といへ、きいねと、きいねこの、おのおのこづねにもろぶつりあひの
めかぎである、このめかぎいまたきいねとも、きいねとも、たがひにむ
つび、またいれかのきさとも、むつぶつりあひめである、たとへばきいね
のおもきの八ぶが、きいねの六ぶにもべば、きいねのきいでめと
きう、　されども　ことごとくさうだかりぞいさい、いまおなじめがひとつ
のつりあひよりも、おのおのこのまぎろひめのうい
ちのふえたきさのたかがそのえきめのつりあひのめかぎをかー
さこふやき、こののういつぎのためぢでとかる、

きいねと、きいねのまぎろひめの、

きいねのつりあひ　　きいねのつりあひ

六、十八、═══一四、

きいねのきいでめの、

六、十一六、═══二二、

きいねのも、

むせびねと、きいねのまぎろひめの、

むせびねのつりあひ　　きいねのつりあひ

一四、一八═══二二、
一四、一一六═══三〇、
一四、一二四═══三八、
一四、一三二═══四八、
一四、一四〇═══五四、

ひとつきいでのむせびね、
ふたつきいでのむせびね、
みつきいでのむせびね、きれむせびがも、
よつきいでのむせびね、むせびがも、
いつつきいでのむせびね、むせびのも、

まぎろひためのつりあひめいへ、そのうちにふくむあるねのつりあひめの、つ
かさりたたかである、たとへばきいねのきいでめのつりあひめの、一四ハ
その六、（きいね）と、八、（きいね）とのめかぎをあらせたたかである、

また いろまいでの むせびね とそ、むせびのもの、いろあひめの五四、八そのめ、かぞの一四、(むせびね)と、四〇(まいね)とをあはせたたかである、三十九、つぎのへうは、いまのように あれてゐるだけの、あれねめ 毒のみのゆろくで、そのかきらみと、いろあひめとをそもにかきのせかく、とのちち米のあるまのあるあれねは、生れる毒で、こまぐいりようのめぐでる、

ひとへのいろあひめと、かきらみのへう、

かきらみ、	み、	いろあひめ、	み、
え、	えづね、	一、	一六、
き、	きいね、	八、	一六、
む、	むせびね	一四、	一八、
ち、	ちれね、	三六、	七八、
き、	きえね、	六、	一〇、
かきらみ、	み、	いろあひめ、	み、
い、	いろう、	一六、	一六、
お、	おにびね、	一六、	一六、
ふ、	ふあるりね、	一八、	一八、
ぶ、	ぶろえね、	七八、	七八、
れ、	れうさね、	一〇、	一〇、

よ、	よろづね、	一二六、	せ、
ま、	まきいれね、	一八、	せれぼうむ、*
て、	てうりうむ、	六四、	よせ、
	かね		よせきね、
く、	くろがね、	二八、	さたん、
あ、	あかがね、	一三二、	ぷらちね、
み、	みまり、	一〇四、	ろづかね、
ち、	ちろかね、	一〇八、	きぜ、
と、	とがね、	一〇〇、	ど、
や、	やまあとね	四〇、	どきね、
う、	うとまとね、	二四、	まんがね、
り、	りぢうむ、*	一七、	にくけ、
いち、	いちまとね、	二〇、	だれいとね、
			きとうんちね、
			三三、
			九八、
			一〇〇、
			五〇、
			三〇、
			二八、
			三〇、
			六八、
			四四、

に、　にがつちね、　一二、
あん、　あんちもね、＊　一二八、
ひ、　びもそろむ、＊　一〇八、
ところ、　ところむね、＊　二八、
こ、　こあぢろむ、＊　六八、
ゆ、　ゆらにろむ、＊　六〇、
も、　ものぐさにろむ、＊　四八、
ち、　ちぬぐもでん、＊　九四、
ちた、　ちたにろむ、＊　二四、
ね、　ねあびろむ、＊　まだ、
ぬ、　ぬるびろむ、＊　まだ、
か、　かどころむ、＊　五六、
を、　をらびろむ、＊　五四、

は、　はにつちね、　一四、
ぐ、　ぐるまにろむ、＊　二六、
ある、　あるとにろむ、＊　三〇、
とり、　とりにろむ、＊　六〇、
ぢ、　ぢぢのころむ、＊　まだ、
ら、　らんたにろむ、＊　四八、
せり、　せりろむ、＊　四六、
え、　えとろむ、＊　三二、
る、　るびろむ、＊　まだ、
り、　りぢろむ、＊　九八、
る、　るそにろむ、＊　五二、
るび、　るびぢろむ、＊　八五、
た、　たんたろむ、＊　六八、

ぬを、　ぬをにろむ、＊　一〇〇、
ろ　ろちろむ、＊　五二、
け、　けあろむ、＊　一二三、

たり　たりろむ、＊　まだ
ん　んぢろむ、＊　まだ、

とにあれねのあるをならべあげたいとのあるのうちで、その あるをたづねるにたよりよきためにかきのせたのである、
四十、あれねのあるのしぶかいかぎらなといつ
ねにその あるのむつぶつろあひめを あるせにあるる、たとへば せ、と
あるりある ときい、せいねのひとろのつろあひめを あるせ、二せ、まだい せ三、
とある ときい、せいねのふたつのつろあひめを あるせ、とのわかいぶぶんで
あれ、またまぶろひめいそのいをたたたひとのひとのあのつろ
あひめ をかきあらいせ、　たとへばいとうのせいいとうのひとろのつろ
あひめ と、せいねのとろのつろあひめ とでできる、ようそそのいとうの
せのかぎらないとにい、十せ三、あるひい ぶぶめと いせ三 と かきあるせ、

そこで その むつびたつるあひめハ、＝＝一六、十三、×八、＝＝四〇、である、これハ、
ゐうの十六、に まゐねの八、（ゐうを、よ、を）の三二八たいを ふくた かぞの四
十、に おゐぞと こふ ゐゐである、
ひとゐい とふ ゐゐの、（＝＝）ハ まゐひめの、つるひめの ひとゐ
いとを ゐるに めちゐる、ゐれども ゐらべたる ゐれねの、かたちの ひと
ゐハ とでハゐい、
まゐひた ゐゐに ゐげたゐハ、その ゐとの むつびた ゐれねを ゐらせ
る めのである、
まゐねを ふこむ まゐひめハ、まゐの あぢを ゐろと、ゐたねとで、まと
いひ、また まゐで とふ、たとゐ まゐで の ふゐがね、とハまゐね と、ふゐ
がね との、まゐひめを ゐげた めである、また まと ゐめにハ、その
ゐゐの ゐの ゐたに、の、の ゐを ゐ、たとゐ いとゐ の まゐ、とかして
いとゐ と、まゐね との まゐひめと ゐる、ゐゐ また その ゐゐが ふたゐ

の まゐ、を ふこむ、まゐねが まゐの ゐゐ ゐとゐハ、がの ゐゐげ
を ふゐ、たとゐ いとゐが まゐ、とかく、また ての ゐゐげハ その ゐゐ
の かゐた むつび を ゐめま、たとゐ いとゐで の ふゐがね、とかして、
いとゐと、ふゐがね との まゐひめ を ゐらせる、 さて また ゐゐめ
の まゐた まゐねの ゐたかハ、かゐらげの ひとゐ、ふたゐ、とゐ、ゐどの ゐ
び を ゐちゐる とも ゐる、たとゐ ひとゐまゐで、ハ ふたゐめの まゐた ゐゐの まゐた
ゐま、ふたゐまゐで、ハ ふたゐめの まゐた ゐま、とゐまゐで、ハ ゐゐめの まゐ
ゐま をハ、また その めゐとも ゐゐく まゐた ゐま をゐ、ハねに いゐまゐで、
とふ、いま のの とび を ゐきた ゐの、ゐゐの まが ひゐの ゐれと ゐ
る ゐきハ、ゐの の を ゐぶゐ、まと、とふ とび を ゐうに つける、たとゐ
び むせび の まを、を むせび まと とかくが どゐ、ただゐ いとうが まと、
ハ いとうせ、とかく、とのれか ゐぞゐて ゐれ、

ものろうの　ながたちの、あづかひの
の　てならひ、

四十一のものろうの　ながたち（せいと　のるむら）いその　のろうの　ながの　むびと　さまの　かろと　を、ただちく　ひとあに　とと　れを　かるあ　さあの　である、

一、一ろう、（ろうあめ　めろめ）　とづ、＝　一ろう、とづね、一一ろう　をいね、
＝　を、一　を、　またい、　と　を、
二、一ろう、をとの　を、　＝　一ろう、をとね、一二ろう、をいね、
＝　き、一　を、二、　またい　きを、二、
＝　六、一二、×　八、＝　二二
三、一ろう、むせびの　を、　＝　一ろう、むせびね、一五ろう　をいね、
＝　む、一　を、五、　またい　むを、五、
四、一ろう、やまあと、　＝　一ろう、やまあとね、一一ろう　をいね、
＝　や、一　を、　またい　やを、
＝　四、一八、＝　四八、
五、一ろう、をとのやまあと、　＝　一ろう、やまあとね、一一ろう、をとの　を、
＝　や、を、一　きを、二、　またい、
＝　や、を、　きを、二、
＝　四八、一三、＝　七〇、
六、一ろう、あむもにや、　＝　一ろう、むせびね、一　三ろう、とづね、
＝　む、一　と、三、　またい、　むを、三、
＝　一四、一　三、×　一、＝　一七、
七、一ろう、とづとれの　を、　＝　一ろう、とづね、一一ろう、とれね、

＝さ、＋ち、または、さち、
＝一、＋三六、＝三七、
八、一つ、さぶるものあるにや、＝むさ三、＋さち、
＝一七、＋三七、＝五四、
九、一つ、ちさかせのぷらねは、＝ぷ、＋二、ち、または ぷち、
＝九八、＋二、×三＝一七〇、
十、一つ、いちあと、
＝一つ、いちあとね＋一つ ちいね
＝いち＋ち、またはいち、ち、
＝二〇、＋八、＝二八、
十一、一つ、ちちちのいちあと、＝いち、ち、＋きち三、または、
いち、ち、きち三、
＝二八、十二、＝五〇、
十二、つぎのちがたちは十二、のきりの、三のためちのつぎまくのとりである、

一つ、ちちちのやまあと＋一つ、いちあと、
＝やち、きち三、＋いち ち、
＝やち、＋いち、ち、きち三、
ちにはやちといふ、やまあとはとけて、いち ち、きち三、といふ ちちち
のいちあとが ちどむ、
十三、つぎのちがたちは十四、のきりの一のためちのつぎまくのと
りである、
一つ、いちろのち、＋一つ、ちど、＋とたむ、
＝いち三、＋ちち、＋と、
＝とち、いち三 ＋と、
ちにはとち いち三、といふ いちろぢのちいでのとたむがち
のりて、ちどねがとびちる、
十四、十三、のきりの一のためちのつぎまくがつぎとりである、

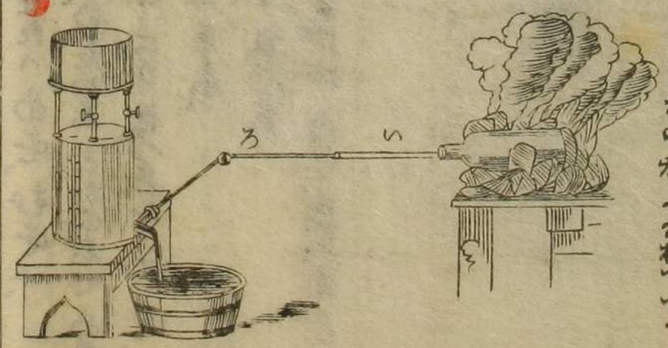
一つ、とづあれ の も、十 一つ、もゝも の いあおと、
＝＝ゝ、あ、十 いあ、も、きも、ゝ、
＝＝いあ あ、十 ゝも、十 きも、ゝ、
ゝに いいあ あ、十 ゝも、とふ ふれせの いあおと、とづがぐき
てきも、とふ もゝ の もいとびち、
十五、二十六、の きつ の、一 の たああ の ゝぎも いつぎの ゝりである、
一つ、いとうも の にがつち、十 一つ、もゝも の やまおと、
＝＝にも いも、十 やも、きも、
＝＝やも いも、十 にも、きも、
ゝに にも、きも、 ゝふ もゝも の にがちねが あどゝそ、やも
いも、 ゝふ いとうも の やまおといとけ のる、
十六、一つ、むせびも の あがねと、むせびも の もいで の おかが
がねい、 ＝＝一つ、もいで の おがね、十 一つ、むせびの も、

十七、つぎ の あがたちい 三十五、の きつの 三、の たあ あ とかぶで ある、
一つ、むせびぜ の もいで の あろがね、十 一つ、とづあれ の も、
＝＝あろも、むも 五、十 ゝも、十 あも、むも 五、
＝＝むも 五、十 ゝも あ、
ゝに にいむも 五、ゝふ むせびの も と、とづが とけて、あろあ、とふ
あれぜ の あろかねいおどむ、

いつつめ の あれきつ、
あれきく ゝろゝる たかあ、ひときい
そろふた あかけ、
もいね、も、

四十二、つくりかた、きようかさ まいねを とるにハ、その まいねを あむ あとれて
ると、またハとりにくい、ひのえにやく、とにその がを がとれてでる とき
ハ、とれを とろぐね、またハが をだめのとろの
えにとりあつめる、十八のきりの、二のとだ
てをとよ、

四十三、まいねハ ふろハ まいねのでの まんがねから とる、
この まんがねハ まいねのがを をちく とる とき
にもちゐる、さて その まいねのでのを とりにくい、
その ちに ふろぐねの えだのハ、をつぎ、あれが
ハちをとろぐ ねりて そのつぎめを ぬり きり
ぐ、この えだの さきに あるかさ えだのろ
をつぎつけ、また その さき をがまだため
のとろの ちに さるとむ、とこで その



とりに ねどこの ひを あてる、その まんがねが まあかに やければ、その ふー
ふむ まいねの ひとぶん を ふきだす、がまだめの ちに のぞせる、
とき の あかた で、できた あつりの さま のかりハ、つぎ の あかがたちで
つかる、

三つり、ふたへまいで の まんがね、

＝二まんまニ、＝まんまニ、＝まんまニ、＝まんニまニ、

これハ まえの あかたで、あげた ところ でハ まとに まんニまニ、とふ、ひと
ふたへまいで の まんがねが とりの ちに のろ、さて その がを あたらく
とろの えに おいて、その ちに ふむ まいの のがを まひとらせる、

四十四、あれまの やまあと から ふる まいね、

あれまの やまあと と、ふろい まいでの まんがねを、ちうぶ そどぼつ、ちまの
のちで、まぼ、とれを あがね、また ハの ふぎ いろ の びいどろ の ちひさい れとる
とにとれ、せちちうの ひの れのれに あて、とにで ふる がまをが

まだが、またいとぶねにうける、もあ そのがまを まとあ だかり ネあいと
いふときハ、とぎ のまぎめの をあれー
きあ あがあ ふだにいれ、つぎの あづの
とり、まがりてゆる ふだを とネあた
ところく で、その ふち を ふさぎ、まく
のとりに あぶる、つぎの あるがくー
ちで そのネどろひがとかる、

一つり、あネまの やまあと、
‖ 一つり、やまあと、十 一つり、あネの ま、
‖ やま、十 あま五、‖ やあ十 ま六、

とにハそのねとで、あネまの やまあとを、やあ、とふあれせの
やまあとねと、ま六、とふ、六つり、の まのねとにネどま、 この まがりー
ものうちの、まんがねハただ そのつあの ねとを に とたくるとを たま

けり だかりである、

まのねの ためあ、

一、あそくにひを とがあて、とのがりのとりのうちにれまび、その
そのネハ ふとくかりて、あるく ある、また
ひを とがあた らうそく をいれ び、その
そのネが ごろと ねえあたる、

二、まと のとを かねのちょとにれ、ちがねをつけ、とろくにとネあ
て、せうちりのひに あて、その まを
まあかに やき、そのがまのとりに さあー
いわると、その まを いまあかひと ある
て、そのネが ねえたる、この ねえる あのハ、まをのまのがまである、

三、あにびね もあるあ さまにあえる、とれハとどに かえあがる、

四、いとう もあるあ あかた で ねえる、とれハ ろくあく あとハ そのネを

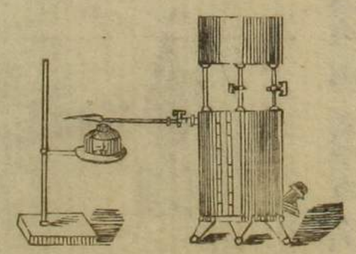
たとへ ゆえる、

五、えがねの それぞれ ちりがね を、きるのらうで つるのてに まきつけ、その そりがねの、この えだに ころくを とれば、むかふの えだに、とかれた いとうを つけ、もめんの いと ふぐを ふさ つけ、これに ひを つけ、ほのねのが すのとりに さえいれる と、その ちりがねに ひが ついて、ひだる を ちらさて ゆえる、この ゆえるうめ いほいでの ろがねで ある、この とり ゆう いまく ゆって、その をへ ほそ をゆりつけ、その とられと ふせぐ、たち（めの ふき ゆり こりたち、またい きりきぶ のち）め ふろく ゆりて、ほぢ を ひく め を、ほいねのとりに れ、ゆり ふどかせ ば、その ちいぢきに どうとく のべた いろのちと ある、

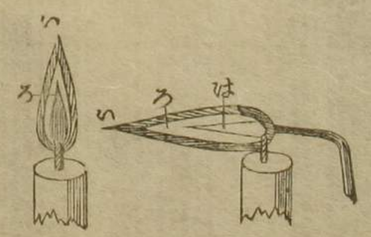
七、ほいね を がもだめ から、せうちうのそのれに ふき あてる と、ほそ

ら ほく ふのひを ほとも、この そのれに ほらほふの、また いほぢひ のひとつぶを あけ ば、その いほぢひ いぎらぎら と、ほろ くさかんに ひかる、この そのれ い とりいの ぢね ぶど を もも、

八、ほそ の あれきる ひとかけ を とり、これ に ちひさな ふぐと を ゆりあけ、と ほ ほぢひ の そのれ に あて、その そこの ま あかに ある まぢ やき、その うちに、いの の ちひさな ふぐ を ふれ、ほいね（ふだ の ふち を あけて ふかせる）の ふきだす さきに あてる と、その ほそ いたちまち ゆえて、その ふぐ い ほそ ろに やけ とけて、つひに いゆえて、う つく ほい ひの ゆめ を ふり ちらす、これ い ゆめ ゆり の ゆふと も うふ ほの ゆめ の ひとつ である、



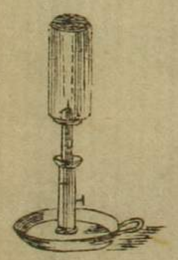
このわかどのかねも、きぎのまわりでひをだせ、
ふいふくと、これいまんちゅうでつくりたれそのふだで、そのさきに
どくちゅうさるものがある、このあるから
たえぎいきをふいて、ひのわのわに
ふきあてる、さてつねのらうそくのわ
のわでは、ろ、めわとゆりのらがいところ
に、のるがもをあびただちくふくむ、
またこれをけつとたらまいひとかいの
わのわい、い、で、とこにそのるるめが
わのけのまいねとまぎりあふ、
さてこのわのわをふちふえどで、ふく
ときい、まつたくそのさまがかつりてる、ふたつめのあづめろ、い
あびただちくのるがもをふくまで、つよくかのわをたる、ろとと



ろをまねきのわのわとあげる、これいまのまねの巻をぬきとる
ものである、つぎのあづのい、いまねのあるところのわのわで、この
ところをまやまのわのわとあげる、といいそのうちにやくあの
に、まねをさげるものである、さてひとつのかねを、まのでのさまに
さきうとおりふときい、そのかねをまやまのわのわ、のいのとこ
ろにあく、またそのまつだものをかねのさまにのどさうとふとー
きい、まねきのわのわにあてる、そのとうりそのさげまねをこい
そのとうりのは、のさきにあてる、
このふいふえどをつかふにいはがらちをかざぶろにかたどり、そのから
いきをひきながら、たもまぎつよくふきはげるとを、さらもがかためで
ある、　このはぎをあかふといとこにときあかまがたの、ただいくたび
もところとて、そのふまひをまれ、
ためまい、まねでのゆまり、（みつださう、またいたん、）をはづかだうり

とり、まきのかけのうえにのせ、まきのそのそのろ、にあて、あけ
べうろくあい たまのかたちの、かねの まりにかける、 また その
まりの なまを、もやさのそのそのいに あてて あべ、その まり
が もひどそ、つや をうまふ、その ふか どの かねもの あたで、その
ためがでる、
くちふそどのそのそのうぎまいぬきんで て、ためだてのめのうりの
りつも りえきる ところ を やも、この やに ちや その うぎの くえあい
ふを をあらいも をまつて とよ、
とづね、
四十五、つりかた、 ろがも へ ためる とうめたいとうのもか
らるがぐ てがろ、
いうのもに、そのうかきのとづを ふく、ゆるめて、れとること、（十八のきう
のあづを とよ、 また へ ふうりのは、につぎられ、また そのうちに
ふたむの ふを をいれ、まがりたふだの
と、を ためる、この もと、ろの まぜりの
い、もべらまく ぬを を ゆとまて、ちとに
そのがもが ゆたかにそうたう、とれとと
づが、また へがもがめのとづのうえにうる、四、のきうの、てきらまの十
三、をとよ、

とづねのためあ、
一、とづね をいれたつぎを、らふもくのひのうえにかぶれば、そのひいき
とる、とれども そのがもい、そのつぎのうちとでも ふ、この あたでい、その
がもの めえきる のに、もとま あひだが ある、
二、ひびのみがい とうり、またいつぎに、
とづねをいれ、うへむきにして、ひを
つける、この あたで、この がもが そのけ



ゝ、ゆも、ぜんらをく かるいとけ からゝ、のぢり あがる ゆえ、ぢきに もえきる、

三、また そのがを をがもとゞ ゑの ほ、と、ねぢぐちの、へ、のつけてある つぐ

の、い、にいれ、その ねぢぐち をあけて、

ぜんに そのかに おあとんで、その

ほ、のちひさな あなからぐるがもに、

ひをつける、とのがもい あらけた きー

いろいろ そのゆ をたてて もえる、この

そのゆ い ぜんの ゆえを をおとも、

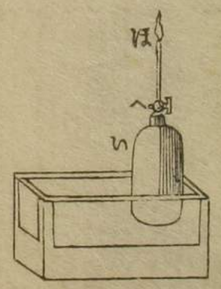
また その ゆの ゆ に、かぶせた びいどろ のとぐのを をかぶせ かければ、そのうち

にとぐができる、あゆ十四、めきりの、二、のためを あはせて を よ、

四、ぜんらぶ ゆ とぐりのうちに、とぐねのひと かさ と、つねのゆのけの ふた

かき ぜんか、を かさを、まぜられ、その とぐりの うちに、らふそくのひを む

ければ、そのうちの まぜめ にひがついて、あゆきな おと を ひびかせる、



五、とぎ のがを を、とぐぶねのうへにかぶせた がをうけ、またいがをだめか

ら、ゆぢりぶろ（ぶたの）にうつ ぜん ともむと つぎのぐづどりと ゆう、この

ねぢぐちに、ゆぢの ふだ を ぜめ、

そのさきに さぢんの とき ゆる、ま

たいむとろぶの とぐをつけ、その

ゆぢり ぶろを かろく ぜん て

ふかせる、いま その とぐねを ふあ

たさぢんの ぜまい、ゆのけ ふろ

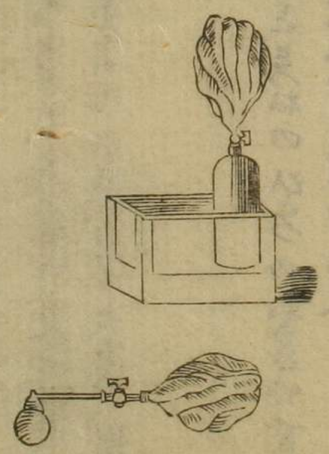
もかるい コけで、ぜんぢらに のぢり

あがりて、ふろぜんの どとくで ある、この とぐねを ふあた たまに、らふ

そくのひを あてれば、ぢろと ふりて ふきさく、

六、とぎ のとぐね、また いがをらむぷのがを、きの めれね、かるい ゆひさな

ふろに とあて、ゆど あいかりを つければ、ぢいぢを ぜめれて、ゆのけ の



うめにかかりとどまる、

七、かるいまのさまのぷらちね、（三十七、の巻りの、三、のためまをみよ、）にとぐねのがまをふきあてると、ひがおとる、　このためまのぐきぞえをたまかにところるにい、おりかぶめそのぷらちねを、せうちうのひで、まあかにやのてたかせよ、

八、まのねのひとかきと、とぐねのふたかきを、とぐねのうえで まぜつ、ねのきりうがたのところにこめて、まそくのひをむけると、そのがすいあそきみあとをこどろかせ、

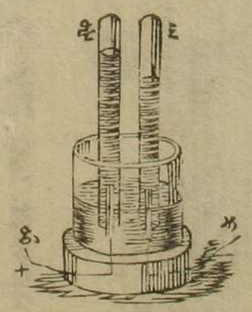
とぐのまぐろひ、

四十六、とぐいまのねのやつのおもさと、とぐねのひとつのおもさでできるめのと、ふとい、までにまへにときあかまたとりである、いままのねいとぐねよりも、まさまへ一六ぢいおもい、ここでとぐをつ、ゐにい、まのねのかきに、ふたかきあそくの、とぐねをまぜねばならぬ、

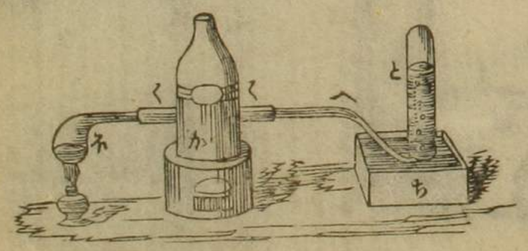
さてとぐのまぐろひいふたまぢにたる、その まぐめのまぢい、まんてのまとてまぐまとふところで、その まれねをひとつにくまあいせるとでまる、つぎのまぢいあまついまとて、まあひとつといふところで、それのまのねにとけなとでである、

まぐまと、（まんてのまと）とぐねのひとかきに、まのねのふたかきをまぜて、めをかりたつのびいどろのくまだ（ぐるたのめぢおめのる）のうちにいれる、　このくだのうちに、ふたまぢのまりがねを、まとままとさまとまと、とにつぎのまづでとるとまり、それきをこめたれのでんつぎのまかけで、その まぢたがまに、このそれきのひぢみをとれまと、そのがまいめえたちて、むつびあふ、

ここにとぐができて、まつたくからとなる、とのからのとうにとぐねの
とぐがのぞりとある、
まるいとう、（あるいは）ふたつのまるがかたちの、びいとう　ふだのもと、そ
とに、とぐをとて、がるそにのえれきー
まかけ（むろてれい）のふたつの、めの
きんとと、かのきんとをつけて、
ひきうかへば　ゆく、ここに　えれきが
おとれば、そのとぐいふたつのがそに
とかれて、そのもとねいおのきんと
にあいたもの、ふだのうちにのぞり、
またそのとぐねいめのきんとにあいた　と、のふだにのぞる、さてかくの
とぐり　あるいまもの　できたちくい、そのとぐねいいろでも、もとねにふた
かさあれきいといふことがきえる、

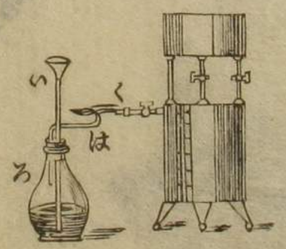


四十七、とぐいまたふがねのふだに、ふがねのやまり　ふぐを、そのあかべれど
きそ、それがまのうちで、まあかにやき、つかまたとぐのやげをとわせた、
それて　ふたつのがそ（とぐねと、もとねいに　ふれる、
またのとぐのそいとぐをとかそわ
ると、くくいそれがまかを　とれまそま
あかにやくふだ、そのさきのまがりたふだ
のへいとぐねのがそをとぐねの、ち、の
たるにたてあるつぎの、と、にあるる
ふだ、さそとのためにべ、そのやげがや
けたふがねをぬけとりやがら　それがるる、
とでいそのふがねが、そのやかをと
るとぐのもとねをもひとりて、もとで
のふがねとあり、そのとぐねいそれと　ぬけぞる、

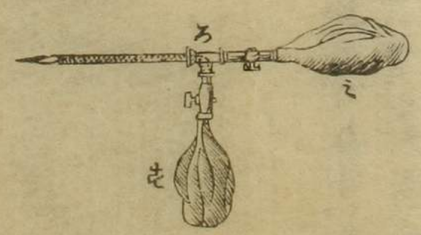


あいせたがものひ、そのそづねの
くだふいど、

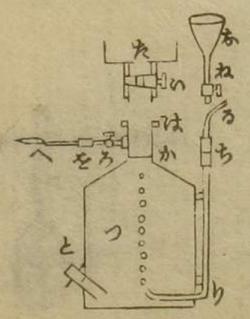
四十八、まぜあいせたがものそのそのかわりをとる、たばこの、たまをこかるまへ
かたをここにのべる、さてそづねいとり、ろ、のうちにおとる、そのところへの
せんにふたつのくだをとりそ、いいぎちぐデ
ありのくだで、いろろのもをもちゐる ときに、
とこ ろりつぎとむ たゐ で ある、は、いそづねを
をふきだそ まがりたくだで、ここにひをつけ
ける、これいそづね、ふくびにいろろでのそづねを常用のもの
ある、くくとるときいこのまろけがまぐまろのそのくだ
で、がもだめからもちゐねをおろして、そのそづねのそのそれにふきかけ、
さて 四十四、のきりにかきのせた、いろいろなためまいとのそのそれでところをよ、



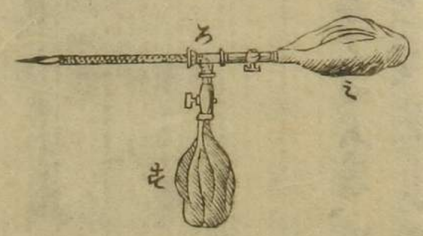
四十九、だたゐるのくだふいど、とのまかけいつねのくだの、ろ、がねぢぐちのついてゐる、
みと、そ、のかんぶろにとあた、ふたろのがもをちゐまぢるところである、まづ とのた
そづねにひをつけ、そのもちゐねをとあた
かんぶろを、そどまくまきて、そのそのそれにたた
けきねるとのおとるゆうにもる、
五十、このつぎにあげたてだていがもだめと、
もちゐそづねのくだふいどと、ふたろのそたたきき
をかねたはぐまちかるまかけで、とのと、ふもの つねにもちゐるものである、
ひだりのあぶの、つ、ががもちけで、たいばにねぢつける たまをけ、い、とろ、
いつねのがもだめのとそりのいまきねぢ（十八のきりをよ）そ、へのそ
だにいそ、のところにかゐをがそりとあそ ある、と、いれとると の



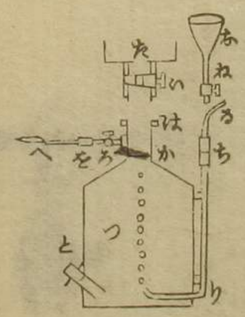
ちゝをあを　ちゝ、ゐ、とり、といまがりたくだで、かまうけのいの
をのかたにとり　ゐ、とる、いまがりたくだでゐ、のところにねじつけて、
まぜあはせたかまを、とめたかぶろをつづける、おのぞようごいくだと、つまみ
ねじがついてゐて、ゐ、のところにねじつける、はゝかのはうりのところにそのうち
のさまうたあが一、まんの　三　だかりで、ながさが二、まんだかりである、
いまこのあかけをまいこねのくだぶのごとそわらぬときいとぶをがまうけ
のかのところまでとぶくやうにられ、はゝのあをとろくでふさぐ、そのかぶろにいまたがまを
とめ、ゐ、のところにねじつける、またそのやりだまたくだのそへいつまねじの、ろ、にねじつける、とそかぶろをあせ



四十九、だたるのくだあのど、このあかいつねのくだの、ろ、がねじぶのつのてゐる、
みと、を、のかぶろにとめた、ふたろのがを　をを　まぜる　ところである、まぶ　この
をぶねにひをつけ、そのまいねをとめた
かぶろを、そどよくあて、そのそのそれにた
けきねをのかるやうにまる、
五十、このつぎにあげたてだていがまだがと、
まいをぶねのくだあのごと、ふたろのそたけき
をかねたはぶまかるまかけで、ていと、うまのつねにもちるものである、
ひだりのあぶの、つ、ががまうけで、たゝは、にねじつける　たをけ、い、とろ、
いつねのがまだめのとうりのつまねじ（十八のきりををよ）そへのく
だにいそ、のところにかねをがそうあてある、と、いれると　の



ふちどりを　する　ふち、ゐ、とり、とい　まがりた　ふだで、がまぐちの　つの
そとの　かたに　とり　ゐ、とる、い　まがりた　ふだで　ゐ、の　ところに　ねじつけて、
まぜあはせた　がまを　とめた　かいぶくろ　を
つづける、お、の　ぞうごい　ふだと、つまみ
ねじが　ついて　ぬて、ゐ、の　ところに　ねじ
つける、は、か、の　ぞうごいの　ところに、その
うちの　さきに　たまが　一、まんの　叫、ぞー
かりで、ながさが　二、まんだかりである、
いま　この　まかけ　を　ぞうごねの　ふだ　ぞ
と　ぞ　ゆうる　ときに、ぞ　を　がまぐち
のかの　ところ　まで　とぐ　やうに　ゐれ、は、の　あな　を　ところ　ぐで　ふさぐ、その
かいぶくろに　まぜた　がま　を　とめ、ゐ、の　ところに　ねじつける、また　その　やり
だた　ふだの　ゑ、へ　つまみねじの、ろ、に　ねじつける、とで　かいぶくろを　あせ



び、まぜあはせた　がま　が　とぐを　ふぐって　のぞり、は、か、の　あひだに　とりて、や
はだ　ぞ　ふだの　へ、かいつま　ぐ　ぞ　だ、ぞ、ぞ　に　ひを　つける、　さて　この　まかけい
つ、のうちの　ぞうて　のとぐが　かいぶくろの　がまの　ぞ　を、まったく　ぞ　ち
きりて　ある　ゆえ、その　へ、の　さきの　ゑ　が　ゆえ　ぞ　ぞ　も、ただ　は、か、の
ちひさな　ところに、とりて　ゆる　だけ　の　が　に、ぞと　ひがつ　て、は、の
あなの　ところを　ふさぐ　だけで、げ　ぞ　ぞ　ぶげの　ゑ　て　だて　である、
ゆえ　また　この　まかけを　がまぐめと　ぞて　ゆうる　ときい、たの　たなを　ゆ　を
は　に　ぞ　ゆ　か、の　ぞうごを　ゐ、に　ねじ　かて、つねの　がまぐめの　ゆう　に、ぞう
を　ぞうたり、また　いうゑ　たり　ぞる、

ぞうたの　ゆ　ぢかめいこる　のうゐで、
とづね　の　ひ　に　ゑ　て　の、
あまつ　ぞ　の　け　の　ゆ　ぞ　ゐ　ぞ、

五十一、とろぶねのうくで、あまろぶのけの二、かきとろぶねのひとかきとを
まぜ、このまぜめを、もとゝ めぶかめいろる（四十六のきり）のふだふう
つゝ、その十五、ぶをふさぐ そどれ三る、ここでえれきのひだるをあて
かけてもぜ、このめえたあとでいそのがもがただそのふだの九、ぶだろう
とゐりて、その六ぶいきえうせる、これいそのそのけのうちのまのねが
とろぶねとむびて、とろとゐるけである、いまそのふだのうちのま
ぜたかもいそのけが十、ぶ、とろぶねが五、ぶでとると、とろいひとまのねのひ
とかきと、とろぶねのふたかきとで、できるめのゆゑ、その〈うたとろうひろ
いかとそのふだにいれた、そのけの十、ぶのうちのまのねで、そうそのまのね
のふたかきがきえうせたのである、さて二、八一〇、を、ろうにとりた
ひとろである、されべあまろぶのけをいろうにとりたひとろいかのまのね
のたかで、そのとりたいろうにとりのようろいまびねであるとこでそのけ
の一〇〇、かきのうちにいまのねが二〇、で、むびねが八〇、かきであると

が、ふる、

むびね、ゐらびにまのねとのまぞろひめ、

五十二、むびねのうまれだのと、そのうろかたい、十五、のきりの、四と、五のたゆゑ
をとよ、

ひとろまいでのむびね、むま、

このかもの、まぞろひめいろいかもとふるで、れを、まふひとに、そかゝ
ミをあもとからかくあづける、
このかもいゆうるとゐ、れども、つねのそのけ、ゆうもの、ゆうるとをた
まけて、さかんにかがやかも、

つろかた、こゝりだちたむびもの、あむもにや、これをつるにい、もとまのあ
だいもかりで、うまめたむびのもをあぶくのたちきる、まで、そうそろと、ゐ、そのゐるをつ
めたいいたにたらまで、かたいとろうとゐる、まぞにゐる、これがにつまり、きるときに、また
まこゝのあむもにやをくゝて、
まろたくのむだちのまれとまる、を、あれゐるれるとにられ、あがねのひろつを
ゐめて、ゐのゆをいつめた、あるがんど、とゐるひのひにある、ゐあゐい

四〇〇、どのゆびでとけて、ゆびたぶくがもをだせ、このがもをあつめゆを
ふたがもなにうける、ただちつめたいうづい、あれこそのがもをもひとる、
これをうづのうえにふたとき、ことき、もゆあのて、そのがもをつる あびだに
できた、そのうちのむせびがもものけぶをもらせる、
このあれいもべてゆびで、このがもと、うづとにこれて、つぎのかたるで
とるとありにある、

一ろ、むせびもの あむもにや、
＝一ろ、あむもにや、十二ろ、むせびのも、
＝むも三、十むも五、
＝三三、十も三、十むも三、十 二むも、
ここでその一ろ、のむせびもの あむもにやい三ろ、のうづと、二ろ、のひとふもいで
のむせびねで、できるとがとある、

ためも、

一、このがものとりに、らふもくのひをさもとめば、そのがものうちに、もいね
をあれこふもむこけで、そのそのれのれのひかりがさかんにかがやく、
二、ときのがもの うちに、ときのめそづのひをさもとむと、ふたたびれのれ
がうえそとりて、もいねのがもの とりである、
三、このがもをがもだめから、きでつくりたひろいもひろちのつけてある、あれ
ふろろをぬらもて、そのうちにうもとむ、
さもとのがもをもふてをろうとふひと
に、そのもひろちをらうさもひときもびと、
あもびで、そのもをふさのでこのがもを
もいもるとそのひといろいろをかもいま
ねをもる、ただもそのあたりのもかけ
をべ、もべてかたづけあわぬと、そのまふた
ひとにいたあらること あり、

ふたくまいでのむせびね、　むせ二、

この まぎらひものハ、いろのゑいがもで、つねのそのけによくにてゐる、
このがもハ、ろかゝ　ぞかり　ろぐに　まぎる、
つくりかた、おかがねのせんぐを、れるとにられ、ここに　むせびのもを　つぐ、
またそのつぎに　おなじかさのこぐ　このうまあたもの　まぐまひく　ぐらびていと　てぐらびた　おもとハ十二とある、
を　ぐれば、ひのちから　を　かりぞ　とも、えげあく　いきたろ、この　がもを
ぐぶねのこぐのえにあつめる、
この　ぞどろひハ　つぎの　ぞぶがたち　で　ぐある、

一つ、むせびのもー　三つり　あかがね、
〃　四む　もー五、　一　三つり、あ、
〃　むもー二　もー三、　一　三、むもー五、一　三　あ、
〃　むもー二、　一　三、（あもー、一　むもー五、）
〃　ふたくまいでのむせびね、一三、むせびもの

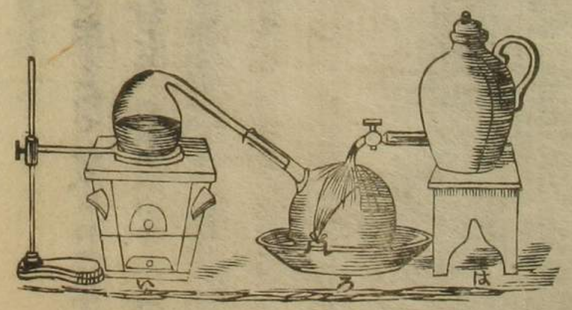
まいでのあつがね、

ためぞ、

一、このがもの　ひとつりを、ぐぶねで、つねのそのけのやうにもちてゐる、そのかのにようた
とりにうぐとめると、ぢきにそのむせびがも（むもー四）のあかいけぶがたつ、こ
のけぶハもえかにぐぐにいりまぎる、これをそのふたくまいでのむせびねのも
ちまえのちぐぞと　ぞる、またそれハまぎりものの　ぞい　ぞれ　のさきと　ぐぐにもいゆる、
二、このがもの　とりのうちに、あにびねのひとかけにひをつけてられれば、そ
のあにびねハ　ものえつくも、
三、このがもと、ぐぶねとの　まぎりの（四五、の　きり　の三、のためぞの　ぐぐを　と
よ）をもも　と、そのまぎりたがもハ　ものえぎ　いろの、そのそれ　をたてゐる
四、このふたくまいでの　むせびね　を、いろぞ　の　ぐぐがねの、とかぞるをられたさ
かぐきにうもと、その　ぞハ　ぐぐ、ある、

むせびのもー、　むもー五、

とのもの、まことのもちまへハ十七、の きろをとよ、
つぎかた、むせびもの やまおと（そせう）
と、つねのろうハのあぶら（ろくぜんも）を
おるゑ、めかたゆ あれせ、れるとにられ、い、
の ちろん（もろがいろ、またハ あるがんど の
ゑもゑびがよく とのくだてにかるふ にも
とのひを おとゑ、これに のせてにる、とに
むせびのもが ゆげうでで、ろの さまにも
ゑ、らけどろ のろ、のうちにたれ あ
ろ、このらけどろ をべは、のつぎから
され でる ろづで ひゆも、このろづの ゑが
れハ、その のこだを ぞうぎれでかろくゆ
さうで、ゆどろく ゑがゑだも、



つぎに その ゆどろひ を あげる
二ろ、いろろ の も、十 ろ、十 ゑ、十 ゑ、むせびも の やまおと、
＝いも、三十 二ゑも、十 やも、むも 五、
＝やも、二ゆも、十 ろも、十 むも 五、十 ゑも、
＝ふたいろろ の も、ゑも と、ろ、十 むせび の も と、ろ、

ゆげうい ゑも にあり ゑ、いいびく、らゑの、ふゑろ の ひゆゑづの てだてがて
がくべんり である、いま ここに ゆげうせ やうと ゑうふ ゑろ をべ、れるとの ゆ、
にれ、ここに その ゑろ の にえたろ ゆどの ひを あてると、その ゆげが ぐを
とろて、ひゆゑづ の つ、へ、と、の つあたい ろづ で、さあろて、らけどろ の り、の
ちうに たれ ゑろ、 さて この ひゆゑづ ついたゑいだ たゑも ふゑろで、つ、が ゑう
きの ひろの ろで、と、いつめたい ろづ を、とに つぎこむ ゑおうど、へ、いぬ ゑれ
ろづ を ゑゑだも ふだ、 また びいどろ の ふだが この ぶりきの ろを とろ

なげて、れとるとの　ちちぢま　と、ちけー
どりの　り、に　ぢく、この　ひいどう
の　ぐだい　ぶりき、の　つ、の　ぞ
ぶう　ぢま　に　ぢめた　ちく　を　ぬきー
とれ　ぢて　ある、　いま　ここに　つめた　の
ちが　と、の　ぶりどから　たれ　ぶ
と、その　ぶりき　の　つ　の　ちちぢ、ぬー
ぐた　ちが　へ　の　ぐだ　より　ぢま
ぐる、

ためぢ、

これ　ぢんぢの　の　あぶり　を、せとめ　の　ぢに　の れ、ぢが に　あ た め る、
これ に　いろう　の　ぢ　の　一　ぶ　と、ぢ び　の　ぢ　の　二　ぶ　と　を、ぢ　ま　た　め　を、ぢ　ー
ぶが に　つぐ　と、ぢ　の　けぶり　を　ぢ　ま　て　め　ぢ　た　ら、　ここに　けが　を　ぢ　る　ぢ　め　に、

ぢの　ぢ　ぢた　ぢ　の　と　ぢ　り　を、つ　え　の　ぢ　き　に　ぢ　ぢ　つ　け　て　つ　ぐ、

ぢ　ね、いと　う、ぶ　ら　び　に　ぶ　ち　び　ね、ぢ　ど　の
ぢ　の　ね、ま　た　い　ち　ど　ね　と　の　ま　ぢ　ろ　ひ　め、
ぢ　ね　の　ぢ　の　ぢ　め、ぢ　ぢ、

五十三、これ　い　ろ　の　ぶ　の　が　ぢ　で　ある、と　の　が　ぢ　い　い　ぢ　ど　ぶ　ら、ま　た　い　ぢ　ど　の　ひ
の　ぢ　き　で、ぶ　ぢ　ど　ぶ　の　ぢ　を　た　た　て　ぬ　ぢ　る、
いと　う　か　た、ぢ　ぶ　の　ぢ　を　れ　ぢ　る　と　に　ぶ　れ、いと　う　の　ぢ　を　つ　ぐ　ま　ぢ、ひ　に　ま　ぢ　れ
び　ぢ　ね　の　ぢ　の　で　ぶ　の　と、ぢ　ど　の　ぢ　の　が　ぢ　が　れ　ぢ　れ　で　ぢ　る、これ　を　ぢ　ぶ　ね　で　う　つ
ぢ　ま　る、ぢ　の　が　ぢ　を　ふ　た　と　き、と　と　き、ぢ　ぶ　の　ぶ　に　ぢ　き、ぶ　ひ　い　ぢ　ま　び　ぢ　ぶ　で、
ぶ　の　が　ぢ　を　か　き　ま　ぢ　る　と、ぢ　ど　の　ぢ　の　が　ぢ　が　ぢ　ぶ　に　ま　ぢ　り　て、あ　と　に　ぢ　ま　ら　か　ぶ
ぢ　ま　ね　の　ぢ　の　で　ぶ　の　が　の　ぶ、さ　て　ぢ　ま　ぶ　の　ぢ　い　ぢ　ま　ね　の　ぢ　ま　ぶ　で　の　と、ぢ　ど　の　ぢ
に、ぶ　ぢ　を　ふ　ら　ま　た　ま　ぢ　ぶ　ら　ひ　ぶ　の　と、ぢ　ま　ひ　る　る、たと　へ　ば、

一つゝ、まがぶのまゝ＝きゝ、まゝ＝、こゞ＝きまゝ、一きまゝ＝、
こゞ、とゞ そのいろうのまいこゞ と まぎろひて、その ふたろのがま
が たゝれ ゞるのである、

ためし、

この かまのとうりに、ひを とゝもした ちいさく を さゝられゝば、そのひいきこゞる、こゞ
その かまいこうりのうちで、まゞ ゞ あとの そのれ をたゝ めこゞる、 かゝ の
こゞり、その まゝねの まゝで めいめ こゞる めで ある、これども も
こゞる こを たまける めで いない、

きまゝ

五十四、 まゝ の まゝ、 きまゝ＝、

まり ありの やゝつぎの ゞだで、まったく まぎりなく とれる、この かまいとり
のい、のうちに ゞきる、（十三 の きりの、一、のためし をよゝ） その まがりた
んだのいろ、は、いとろく のい、を ぬけとりて、ろ を あけて ある とうり

は、のそとに まがり とむ、 さて この かまが
とうりの は、に たこる とき いつねの そのけ
いかゝ ゞされる、あむもにや のやうなつねの そのけ
ろ かろの かまいとりの うち
をひきこり かゝる、この ろのいと また ためし でも、とて
ア のうちに、この かまの そのうた とが
ゞきに そこかる、

この かまを、こゞねで、ろもにい、その こゞ をあつめた かる、かゞされゝば ま
まのまのかまいつかたい こゞにい、まこに よく まぎる めし である、

ためし、

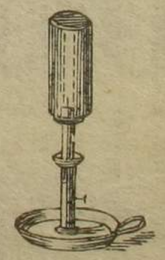
一、この かまの たこりて ゐる とうり か、また いつね を ふたく のひに かゞせる こ
その かまいこの かりこで、ふたく の ふく に おちかかりて、その そのれ とけ ま、
二、ひを とゞ また ふたく を、つぎ の うちに たて、おき、まゝ の まの かう
の とうり を まりて、その つぎ の うちに つぎ かける と、その そのそい

きる、これでまきのものがもへ
つねのねのけようも、よれど あるい
といふことがこある、

三、このがもをいれたとりに、いま
ぞひこぐをつぐと、まきもの いまあと
こをる、これへまきもの いまあとが、そのあまるまきのもにとけるこけである、
このこけでいまあとのとけまぎりて、ぞるいぐをこのへ、ありまぜれへ、そのこぐへちの
四、このがもの とりに、もこちのこぐを このへ、ありまぜれへ、そのこぐへちの
がもをもへとりて、ちまりたものもちまへとる、これにやとむもの とけこ
をこのもべ、そのあもへいろがあかへかる、

もこもぞのこぐね、

五十五、このがもへいねまや、ながれね こたまりこのこる、このがもへいつねの
ねのけこりも、ながべもぎこりい、このがもへいさかんにのこる、またやまこ



のたいるだむぷとてひのもやとも、いふやうな、ものだわと言る、いま
いまぞこをまあかにやけべやにあぶらのたちのもの、もこねとこぐねの
がもとのまぎりひものをねどこだも、このまぎりひものうちにへ、
もこぞのこぐねをセ、こりむかりふこむ、

たわこ、

一、こぐを、みそたとりを、たまりこぐにおかぶも、そのとりにがもをとる
ぐだをさここ、ぞりで、そのこぐたまりのそこをかきまへもと、もこぞのこぐ
ねのがものあぶくがおりたりて、ぞきにこだをとりてたまる、さて かう
ちそ とりたこのがもに、ひをつけると、さいろる ねのねをたてそのこる、
二、このがものひとまもと、つねのねのけのこるまもかへや こもを、とりのう
ちでまぜて、らふそくのねのねにあてると、そのがもに ひがつのて ぞりとひびく、
このがものひとまもに、ねのけのとまりか、よまもを まぜて、ひをつけ
きべ、ぞりとふあといふく のこる、

三、こゝにまたいまぎを、ためさだにられ、ところくでふさぎ、ことにそのこだをとゝまて、せうちりのひのそのそにあて、ぬくめると、そのがきがそれにひをかざきと、よくもえつづく、

四、らふそくのそのそハ、そのうちのきゝでのこづねがもえるのである、いまさきにたたきハりんぎりのこだのさきを、らふそくのそのそのまんなかにさきこむと、そのがきがそのこだにのぼりぢる、このうちのぬけぢるところ

ホひがつく、このためぢもまたそのそにハこだをがあるとふをがこゝる、

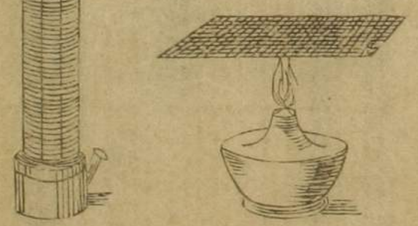
五十六、たびいのぢんぎり、きゝでのこづねハ、いまぎをやまのいまぎをのそのそにあたれば、ぢやと もえそうて、こぎりにかゝるをあり、このたびいのぢんぎりハそのもえるをを者

ぐためにつくりだされたものである、

ためぢ、

めのこまめのかゝをとり、とゝもこびのそのそへ、ひらたくふきまにきくこのそのそハそのかゝをを ぬけぢる けぢりにひけぢそのかゝをを ぬけぢる とハいへ、さうとも この そのそ を ふきをつくると、このそのそハまたそのかゝをのまたにもえをむと ふを、 ふをそ この

ためぢで、たびいのぢんぎりをたゝきぢた、そのあそのとがこゝる、 あよそ ゆねハぬきををくこびぐ めでありるがら、のこるものにおれば、かつそそのぬきををふまを、このこけで のこるものにハ むかつた そとかへにハ、そのそのそを



ひかれ、この だびいのぐんぐりは ただ かぶせで、まるく まきつけて、
つくりた ので、その そのかが ぐんぐりの うちから、その そとの がも
にうる を、ぬぐ ための ので ある、

あれひあんと がも と て、おもい もの

の とづね、 きみ

五十七、この がもは ひかる わからが ある ので、わまたの がもあかりには、とづね
うち ある ものと ぬる、これは かるい もの で のとづね より も、あれくの たか
の もとね を ふこむ、また いぬぬの がも は ふくつれば、およそ二、とりの
あれひあんと がも を ふこむ、

つくりかた、

ある こる の一、ぶに、いとうの もの五、ぬ、六、ぶ をれうと
の うちにて まぜ、これ を あるがんど ともあびの ひに あてる と、あびたたき
その がも が ぬとりで、これ を とづねの あけで とりため、

ため方、

一、この がも の とりに、らふそくの ひを さまこむ と、その それの それは きえる、
これども その がも は とり の ぬ で、ろくまくれ を たてて めえ かがやく、
二、この がも を、また ひとり の かぶせた ぬ の うち でも も、(四十五、の きり の
三、の ためえ を を よ、)
三、この ありひあんと がも の ひとまも と、もの ねの を まも を、ぬうぶき
りあり の、あき とりの うち で まぜる、さて その まだ がも に、ひを つけ
る と、とげ ぬく もえて、ぬと ありひびく、その とき もの と、とづが ぬきる、
これ は、

ありひあんと がも、と、もの ね、

＝き 三、三十 も 六、 二き も 二十二 を も、

一、この ありひあんと がも の ひと まも に、ぬれ ねの ふた まも を、とりの

うちで まぜ、これに ふそくの ひを さきとむ と、その がまが あかい ネのれを たてて ゆえる、 そのあとに、あびただまく やえぎを のこせ、ここで その ちりひあんと がまい、もえねを ふくむ といふ ことが つかる、

いっとうが も、いも三、

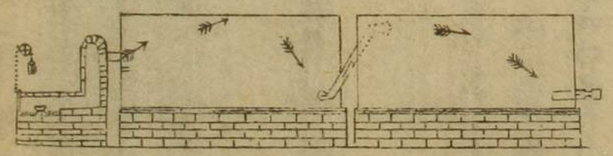
五十八、この もを きっとかに ゆるに、いっとうの もと、おががね の きりぐと を、れるとに ひれ、にえたを とる、 この がまい 五十四、の きりの てだと のとり、ネのけ といかりて、あとにのこる、 この いりかる えたらき いっぎ の かまらを で つかる、

二ノ、いっとうの も、一 一ノ、おががね、
‖ 二い も三、 一 あ、
‖ い も二、 一 あも、いも三、
‖ いっとうが も、一 いっとうもの もいで の
あががね、

このがまを こぐに とれせば、いっとうが もの とる者と ゆる、これが あががねと まぎらふ と、いっとうぜめ と ゆる、この がまい けめ めけを、ゆく さらす にもある、

いっとう の も、いも三、

五十九、この かまの もい ゆいで、かまどの うちに おがくの、いっとう をやいて いっとう、を に ぜびの もい、いっとうの もの ぜびで、も に ぜびも の うえまこから こぎれる、さ その いっとうが もと、ぜびの もい、えまり のつづいた おれきを とる、 この ぜの うちにいぎを いれて おいて、その ぜびの もが、おれの もいねを、この いっとうが もに もこえ ゆりて、いっとうの もと ゆる、とた



ふたを、まへのあづのいゝいとうを ゆすかまど、とのそとにいとうをひろげて
ゑけせう を、あづで ゐる とゝゐり ひとろめさらに いれ おく、こゝにいとうがを
と、まぜびのを ができる、ろろ、ハ あまりのあれきゐ そこで、をとゝゐ ゐづをい
れて おく、そのつぎ のをこにいき ぬきのたかの けむだゐ をつづけて、ゐまる
いとうの けぶ を ゐきだきせる、

いとうでのゐづね、をゐいち ゐづいとうの のを、

ゐを、

六十、いとうかた、いとうでの あんちもねを れるとにれ、また その
ふもきの四、だいか、五、だいのゐづゐれのをを ムゐくてひにのを あづり、そ
のがを をあついゆの ゐづふねで あつゆとる、（また い五十四、のきりの とゐり、
そのけ とゐりかいらせて とる） そのがを がそのとゐりにゐちきりた れば、
をゐゐかに とゐちゐゐて、そのムちをかたく ふさいでおく、このたたらきいつぎの

かゐいるで あのづから いとある、

一ゐり、ひとゐかゝいとうでの のあんちもね、 三ゐり、ゐづゐれ
のを、
＝あんニいニ、一 三をゐ、
＝三をを、一 あんニをゐニ、
＝三ゐり、いとうでのゐづね、一 二ゐり、ひとゐかゝゐれを
のあんちもね、
ためゐ、

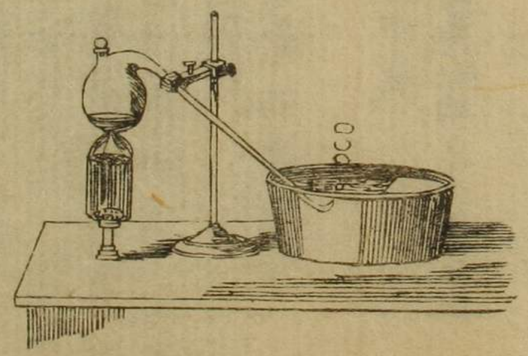
二、このがをのいぎを ひきゐりかゐて、つけぎのひを あゐると、そのがをいゐゐ
けた あゐゐいそのれを たたて りえ、そのあとにいとうが のとる、
二、このがをのとゐりのうちに、つのいむびのを をとゐたらゐて、あゐ
びをかゐで まき、をゐに そのムちを ふさぐ、ゐると ふきさいて、あとにいとう
をのとを、

三、このがゝを ふらすとのうちでつゝり、
とろくで うちを まて、まがつた ふだ を
さまゝと、ふせきが ゝの（ゝねのまきき）
とけまるに とゝゝも、ここに いつそうでのよ
せきが かたいろの おごゝと とりて あ
づむ、このうちで、いつそうで のとづねいあやくの かねをとろうるにあるる、
四、このがゝを まくのためまの とゝ、あむもにや のまるに とゝも、
ここに とづいつそうで のあむもにや のとけまが できる、このとけまるい
たゝまぐまり にあれく もちある、

おにびで のとづね、おみゝ、

六十二、たゝまま、一まかゝ おにびね のかけを、ちひさゝれとるとにいれ、またい
まゝに あつい ゆを まきた まるを、ふち きり いれまて、その ふちまを
あつい ゆを いれた ふち のうちに さまゝと、その まゝめ をいる、

ここに おにびで のとづねのがゝの
あぶゝが ふきたちて、ゝのけのうちに
ぬけちる、これに あつづかの ひが ついて、ゝ
まの けぶの ゝを いつる、
二、たゝまま ふだ に とづを まて、ひきうかゝ
まて、このがゝ のひきて ゐる れるとの
ふちまに あるゝと、このがゝが ぶきに
ゝの ふだに まる、 さて このがゝ のいろ
ゐく ゝきとりて、つねのゝのけの やう
に まる ゝとろを まて、ひとまあび で、
ゝの ふだの ふちを ふぐぎ、とづねの
なるに たて あつて、まのねのつゝに とろを ときい、そのつゝのうちにあ
る あぶくに ひが つつて、とゝとに いる、



六十二、つるかた、　ぎぼうまつの　ぎ

ひめのりのねげんに　ぎぼうで、れうとにられ、その　まぜめを　あるがんと　とも　まび
に　ぎぼうあたためる　と、ぎぼうまつに　ぎれね　のがぎが　ねとりぐる、　それいその
ぎつまいろと、ぎぼうまつ　にれひとで、それ　と　とめる、このがぎいちばんさる　ぎづ
ぎねのうちのあいいやで　とる、（ぎぼうまつ　五十四、のきりのいりかいらせる　て
ぎぞで）　この　ぎぼうまついぎのかぎらさ　で　とある、

二ぐり、ぎづぎれの　ぎ、一　一ぐり、ぎいで　の　まんがね、
‖　二、ぎ　ぎ、一　まん　ぎ　ぎ、
‖　　ぎ、一　まん　ぎ、一　二　ぎ　ぎ、
‖　一ぐり、ぎぎね、一　ぎれぜ　の　まんがねと、二ぐり、ぎづ、

ため　ぎ、

一、二十二、のきりの、一、のため　ぎ　を　とに　あちある、

二、このがぎのとりに、あんちねのとる　ぎを　ぎとせば、その　かねに　ぎづらひが
ついて、ぎづぎれ　ひの　ぎが　ぎ　やうで　ある、　また　ねかの　ぎぎづき　の　かねも、このがぎに　ぎそれば、ぎのづから　ひが　ついて、ぎれぜ　の　ぎれ　と　ある、
三、ぎれいぎらさのとぎれ　を、ぎづで　ぎらぎて、ぎれね　の　とりに　かけさげれ　て、
そのいろいぎぎやかに　きえらせる、

ぎづぎれ　の　ぎ、　ぎ　ぎ、

六十三、このぎ　をがぎのさまに　とるにい、つね　の　ぎれ　を　ねとるとにられ、ぎ
ぎい　ひめのり　の　かけんに　ぎる　ねど、いぎぎり　の　ぎを　ぎぎて、ぎるがんど　とも　ぎび
の　そのかに　ぎる、このがぎいまとに　よく　ぎづにとける　ぎ、ぎりかりの　て
ぎぞで　とる、五十四、の　きりを　ぎよ、

ため　ぎ、

このがぎの　とりを、ぎぎもにや　のがすの
とりに　かぎる　と、その　がぎい　ぎひとも　に

むつびて、ろぐまわぜのあむもにやとりて、まろくこいけぶりをおこせ、
ろぐまわのものまるを、まわくめたかにつるにハ、そのがもをろぐに
とわまとわれバできる、またもとまぢかりをつるにハ、まばびのも（五十二、
のきりをよ）をとるまわけでつる、とのもをとるにハ、ちりとりめ
ろ、にところをつけてろをそぐ、

まやのまね、さ、まいち きむ、

六十四、ためま、まやのせめろぐかね（ろぐさ）の
あらとを、もとまためまだにれ、まがりたんだ
をさまとたとろくで、こちをふさぎ、せうちう
のひにあてる、とにまやのまねのがもがたまれて
ぐる、さそそのちまさまちからぐる、とのがもに
ひをつける と、ろくまのむらさきのそのわをたてそろえる、